

IGF 2023 に向けた国内 IGF 活動活発化チーム
第 7 回会合 議事録

1. 会合の概要

日時： 2021 年 9 月 21 日(火)17:00～18:55

会場： オンライン

主催： 一般社団法人日本インターネットプロバイダー協会(JAIPA)
一般社団法人日本ネットワークインフォメーションセンター(JPNIC)

参加者数： 16

参加者一覧（五十音順・敬称略）：

上田 格	日本電気株式会社
小畑 至弘	BizMobile 株式会社
佐藤 信二	個人
高松 百合	JPRS
武田 真理	総務省
立石 聡明	JAIPA
中田 諭輔	日本ネットワークイネイブラー株式会社
濱口 智美	総務省
浜田 忠久	JCAFE
堀田 博文	株式会社日本レジストリサービス(JPRS)
本田 聖	個人
前村 昌紀	JPNIC
Miura Koji	SoftBank Corp.
森口 友里	株式会社インターリンク
森下 大	総務省
山崎 信	JPNIC

司会進行： 前村 昌紀(JPNIC)

議事録案作成： 山崎 信(JPNIC)

2. 資料：

1. プログラムチームからの報告・相談（プログラムサブチーム）
2. 国内 IGF 活動へのお誘い（エンゲージメントサブチーム）
3. IGF2021 事前イベントについて（イベントサブチーム）

3. アジェンダ：

3.1. 本日の打合せの目的確認

- IGF2023 ホスト（政府）としての検討状況の共有
- IGF2021 事前イベントに向けた準備状況の共有

3.2. 前回議論の振り返り

- 第 6 回会合議事録案の確認

3.3. 宿題の進捗確認

No	状況	内容	担当	期日
10	完了	第 4 回会合の議事録案および録画のラストコール実施	山崎	8/30-9/6
11	完了	第 5 回会合の議事録案および録画のラストコール実施	山崎	9/6-9/13
12	完了	プログラム提案採否案作成	プログラムチーム	9/月上旬
13	完了	事前会合の日程確定	山崎	8/30-9/6
14	完了	チャーター確定版の公開	山崎	9/15
15	完了	プログラム提案者への採用通知および追加依頼	プログラムサブチーム	9/10
16		第 6 回会合の議事録案作成	山崎	9/21
17		事前会合の開催形態確定	イベントサブチーム	

3.4. IGF2023 ホスト（政府）としての検討状況報告

3.5. IGF2021 事前イベントについて

3.5.1. 進捗共有・議論：プログラム検討サブチーム

3.5.2. 進捗共有：ステークホルダーエンゲージメントサブチーム

3.5.3. 進捗共有：イベントサブチーム

3.6. Todo 確認

3.7. 次回打合せについて

3.8. その他

4. 議論の概要

冒頭で前村氏が司会をすることについて異議がないか確認が求められたが、特に異議はなかった。次いでアジェンダに沿って議論が行われた。

4.1. 本日の打合せの目的確認

特にこれまでと違う点はないため、省略された。

4.2. 前回議論の振り返り

山崎より、作成途中だが概ね完成に近づいた第6回会合議事録の概要について以下の通り説明した：

飯田：IGF 2023 に向けて対応するためには協議会のようなものが必要。本活発化チームメンバーに、総務省と一緒に事務局的な推進役を担ってもらうのがよい。実現方法は相談しながら進めたい。

小畑：IGF 2023 開催で解散となってしまうことをいかに避けるかということと、ボトムアップの議論をいかにこの流れに巻き込むか、および議論する場を提供するのが重要。

飯田：協議会が必要だということであれば、2023 終了で閉じるかどうかはその後の議論による。

小畑：協議会と国内 IGF 活動活発化は並行して別にやっていくのでは、2023 に向けてつじつまを合わせるのには、長期的なものとは必ずしも合わない。今いろいろな団体においてシングルステークホルダーで議論をやっており、役所も縦割りになっていて、その配下の人達の議論も合流しないということで、壁を取り払うには省庁をまたがるのか、その配下での議論をまとめるのか。

本田：様々な声が自由に挙げられること、色々な観点が提起できる場であることというのが重要。

八田：インターネットガバナンスでもアウェアネスを高めなければならず、そのためにはインターネットガバナンスの情報ワンストップショップみたいなものが欲しい、具体的には Circle ID というサイトに類似したサイトを立ち上げてはどうか。

小畑：（本田氏の意見に対し）個人の意見を吸い上げる役割は欧米諸国であれば市民団体が担うだろうけれども、日本ではそれほど強くないので吸い上げるのは難しいので、そのやり方を考えるのも大きな課題。

実積：色々なところで議論があって連結していないということについては、外から見ると IGF が認知されていないのが原因だと思うので、そのためには自分のところを通してもらうようにするところから進めるのがやらなければいけないことではないか。

本田：何かあったら IGF を通して言ってくれというのは無理だと思う。

前村：学会なり個別のコミュニティを一か所に集めるための正当性があると良いという点は共有されているが、それをどうやって作ればという決定打がない。

小畑：政府主導の一般的な国際会議のやり方で IGF 2023 を進めていくとまずいのではないか。2023 はプロモーションイベントとしてこれを餌に使いながら活動を活発にしていくべき。

堀田：プログラム提案が5件集まったので、この会議の時点の週に集まって検討することになっている。事前会合の日程が決まらなるとパネリスト候補が登壇できるかが決まらなのが問題。プログラムを3件程度としていたけれども4、5件にするという風にして良いかということで、これはあとで良いということになったと認識した。

4.3. IGF2023 ホスト（政府）としての検討状況報告

飯田：将来的な名前や具体的な構成はともかくとして、マルチステークホルダーによる取り組みの母体を作っていくのに向けて、省内の体制を構築するための議論を積み重ねつつあるが、具体的な報告ができる状態までは行っていない。IGF 2021 に関してホスト国であるポーランド側と国連 IGF 事務局から説明があり、すべてのセッションがハイブリッドであるとのことである。総務省が主催するオープンフォーラムについてもハイブリッドセッションとして運営すべくトレーニングを受けることになっている。現地（ポーランド）に行ける人は行っていただきたい。そうでない人もオンラインで参加して 2023 もしくはそれ以降に向けて経験を積んでいければと思う。年末か年度末にある程度の形が積み上がるよう目標設定して協議会に向けて態勢を整えたい。

本田：各プログラムへのスピーカーとしての提案や、この辺りだったらこの辺りのところへリーチすれば、適切な人がいるかもしれないというような、もう少し主体的・能動的な参加を期待したい。協力するというのは分かるが、どこに誰がいるかというのは、我々民間は知らない人も多いし、私も知らない。そういったところで、事前イベントに対しても、もう少し前向きな取り組みをいただけるのではないかと思っている。

前村：能動的な参加というのは、他の省庁の皆さんなどということか。よく分からなかった。

本田：そういった省庁などについては別に分からないが、この件についてはこの省庁といった振りはあるのもよいと思う。話者を出してくれとかいうわけではないが、少なくともある程度アレンジというか援助がないと、せっかく事前イベントをやっている政府セクターが誰も出てこないのは問題だし、逆にプログラムを組む側も、（政府セクターの話者を）入れていないというのは敢えて入れていない訳ではなくて、誰だか分からないから、ということもあると思う。

前村：プログラムに対して、誰か推挙するというのを積極的にやっていただけるとよい、ということか。

本田：そういうことではないかと思う。解決策というか、小畑氏が指摘した件については。

小畑：JAIPA でイベントを開催する際、プログラム委員が結構個別にアウトリーチする。場合によっては自らプログラムに登壇し、自らできなければ知り合いの関係する人たちに声をかけてといったようにやっていて、ウェブに載せました、皆さんどうぞでは誰も来ない。プログラムを組んだ人は、業界全体や産業全体に渡ってバランスよく話者候補を知っている訳ではないので、誰か介入しないといけない。主催者やプログラム委員は自分たちの（知っている）範囲ならアレンジできると思うが、今回のマルチステークホルダーみたいな、政府と言っても今回ある意味誰がやるのかというような状態になっているわけなので、それでぜひとも総務省の人に、この件だったら経産省の誰々さんを頼ってくれたらいいよ、ひょっとしていい話があるかもしれないとか、ちょっと声を掛けてみましょうかというアクションが必要ではないかというのが、多分本田さんが言っていることだと思う。あにくどこの省庁も IGF は積極的ではなさそうなので、待っていて何か出てくるだろうというのは 100 パーセントあり得ないし、チャンネルを通さないとまず門前払いを食らうのは 100 パーセント確か、という状況に今あると思っている。

もう少し具体的に言うと、現役の人が動かないと無理。少し聞いたところでは、経産省なども OB 系の

方々はIGFなどに関しては全然動きがなさそうなので、現役の経産省の職員を通さないとおそらく経産省を巻き込むのは無理だと思う。現実的には、どこの課が担当しているかでさえ誰も分からない訳で。そこをどう乗り越えるか。この間も言ったが、1件ぐらいは事前イベントに政府系の人が入っていた方がよい。最悪総務省の人にどれかに入ってもらってというのはあるだろうが、それに加えサイバーセキュリティ関係のところでもよいだろうし。

本田：現役の原課ということにこだわらなくても、例えばセッションの内容に当てはまるのであれば、インターネット法制などの研究系の人などを見つけてくるのはどうか。

小畑：政府系の研究所はマルチステークホルダーで言うと多分アカデミックだと思う。なぜなら政府系の意思決定に対して何ら貢献している訳ではないので。ここで呼びたい人というのは、自分のステークホルダーに対して何らかの権限を持っていたり、義務を負っていたりする人なので、そういう意味で現役の人を捕まえないと無理ではないかと。それはなかなか難しいので、現役の総務省の人に助けていただけると、少しは可能性があるかと。

前村：そのようなヘルプがあると、確かにとても助かるだろうと思ったが、総務省から何かコメントなどがあれば。

飯田：5つのセッションで、マルチステークホルダーだが全部のコミュニティが全部（のセッションで）揃わなければいけない訳ではないという話が前にあったと思うが、政府系の話者がいた方がよいと思われるセッションがあれば教えていただきたい。私のところで全部ワンストップで捌けるとは言わないが、総務省や他省庁も含めて出てくれそうな人に繋いだり、あるいは、例えばセッションのテーマにドンピシャな人が出てくるのは、結構当事者にとっても難しい場合があるかもしれないが、その範囲である程度語れるような、多少ちょっと所掌の横のようなところや、どういうアレンジができるか、逆に希望もないのにセッションに政府系を送り込むというのは避けたいと思っているので、まずはどのセッションで政府系の話者の希望があるのかというのを教えてもらえれば、私のところで全部揃えられるかはともかく最大限努力はするし、できれば希望のあったセッションには政府系と言える人を一人ずつは送れるようにしたいと思うので、具体的にどのセッションに対して希望があるかを教えてほしいと思う。

堀田：プログラムそのものに対して意見が出ているので状況をお話しする。まず活発化チームのプログラム委員会が手を突っ込むかどうかということに関しては、この前の打ち合わせでも今回は提案ベースにしたので、活発化チーム側がセッションに誰が登壇するかには口を出さない方がよいだろうと思っている。ただマルチステークホルダーっぽくないのはまずいから、マッチングのお手伝いはすると思っている。次のプログラム検討サブチームのところで話すが、実際5つのうち3つは飯田さんの力を借りた方がよいかと提案者自身と私の間で話しているので、そこについては多分飯田さんに相談が行くだろうと思っている。この辺りの具体的なところは後でお話ししたい。

前村：プログラム編成の話だと思うので、その時のタイミングでよいと思う。何か他にあるか。

小畑：今度の(IGF 2021)ポーランドはハイブリッドで開催されるということだが、時差的に（日本からの）参加者はかなり厳しいのではないかという気がしたが、そういう議論は全然出ないのか？

飯田：私も全部は把握できていないが、そこは当然配慮があって気にしていた。昨日も（現地ポーラ

ンド会場の) 会議室は現地時間で9時から19時しか取れなかった。24時間オープンにしたかったが、そうした場合どうなるのかとも思うが、その時間帯で不利な状況に置かれた人はどうやって参加するのかといった議論はしているので、まだよく分かってないが、オンラインハブ、多分アクセスセンターみたいなものだと思うが、を各地に作って、そこで議論への参加を促進するみたいなことも考えている。もちろんハブを作っても時差は解消しないが、各地域でそういったフォローをして、例えば変な時間帯になってもハブは国連側で用意してあげるといことなのかと思っはいる。録音をという話も出ていたようだが、ちょっとそこまでは確保できてないように見受けられた。実際にはリアルタイムでオンラインと現地の話者が対等に順番に喋れるといったことまでは議論されていたが、ヨーロッパ時間で9時から19時の時に真裏になってしまう人たちはどうするのか、みたいなところまではまだ手当てできてないのではないかなと思う。

小畑：真裏ではないとしても、ヨーロッパなので日本との時差は8時間となる。そうするとスタートが夕方5時で終わるのが早朝となる。ハブというのは多分サテライト会場みたいなところで、場合によってはそこに行くとは良好な環境があるとか、スクリーンがあるとかそういうものだと思うが、そもそもその時間帯に日本でハブを運営するというのは非現実的だと思う。夕方の5時に開けて、そこから午前1時2時ぐらいまで開け続けるというのは、そういう(ことができる)会場を探すのは大変だと思うが。

前村：ICANN 会議では、開催地に決めていたところのビジネスアワーでやっている。その例に習えば、今回は欧州時間のビジネスアワーでやる。そうすると、日本にとっては夕方始まって夜中に終わるからまだましで、一番割を食うのは米国西海岸位の人達で、夜中に始まって朝終わると。夜中に始まって朝終わる ICANN 会議というのも2回ぐらい経験し、きつかった。そういう風にならざるを得ないというのがグローバルなリモート会議開催時の問題点なのではないかと思う。

小畑：ICANN はある意味物事を決める団体か。

前村：そう。プロセスを回すためには参加しなければならないというところがあるだろう。

小畑：たとえ朝の3時だったとして、あなたは委員なのだから必ず参加しなさい、はい分かりました、で済む。

前村：IGF の場合だと、登壇者とならないと参加の強制力が働かないかもしれない。

小畑：そう。ただそれでも条件が不利な登壇者がかなり割を食うということ。

前村：そうですね、ヨーロッパ時間だとアメリカ西海岸とかは不利。アメリカ西海岸で開催されれば日本およびアジアは不利。だからシアトルからハイブリッドでやり始めると言った時に、アジアから大反対が起こった。なかなか難しい。

小畑：今度2023年に(IGFを)日本で開催すると条件不利なエリアが増える。もちろんコロナの状況次第なのだろうが、コロナが収束していても本当にやる価値があるのかということ。今後もというのは、渡航の自由化がされた後でやる、それだけのコストと時間で労力をかけてやる価値があるかどうかというのは、私自身は疑問に思う。それは我々が決めることではないので。ただその時にそれを決めるのはMAGなのか？

前村：コンサルテーションはするかもしれない。その他にないか？そろそろ次に行こうかと思う。
【特に異議なし】

4.4. IGF2021 事前イベントについて

前村：では事前イベントの進捗共有ということで、プログラムサブチームから願います。

4.4.1. プログラム検討サブチーム

資料1に基づき堀田氏から説明があった。

堀田：4人からの5セッション分の提案に対して、9月10日にプログラムチームから提案者に連絡した。提示した候補日時から選択してもらわないとプログラムが組めるかどうかすら決まらないが、まだ2セッション分しか集まっていない。提出がまだの方はよろしく願いたい。

先に出た、政府からの登壇者を含めてマルチステークホルダー色を増すということに関しては、2セッションに関しては政府の登壇者候補を自分たちで探すのが難しいので、飯田さんに相談し紹介いただいた方がよさそうということ、今セッション提案者と私との間で相談中である。1セッションについては経産省かIPA位から人を呼べる可能性があり探していると聞いている。

オープニング(2.1)、キーノート(2.2)、クロージング(2.3)について決めていく必要が出てきた。登壇機会と時間についての想定を書いてみた。オープニングに5分、これはほぼ挨拶だけ。それからキーノートが2つ、インターネットガバナンスへの招待と、あと日本的なインターネットガバナンステーマを何か決めて少し深堀するっていうものの2つ必要かと思っている。クロージングは、閉会の挨拶と、本イベントがIGF 2021の事前会合なので、IGF 2021自体への参加促進の話をする位かと思う。1日目は2.1と2.2と2つセッションをやり、2日目は3つセッションをやった後クロージングをするっていう割り付けができればよいかと思っている。時間割と2.1~2.3の話者として誰がよいかということに関して、提案をいただければありがたい。

最後に、3.具体的進め方だが、あと1ヶ月あまりになったので、7日間のラストコールっていうのが致命的な停滞を生む恐れがあると、プログラムサブチームだけではなく各サブチームが判断した場合は、活発化チームに適宜報告を入れつつサブチームごとに独自の判断を進めることを許容いただきたいと考える。資料中星(★)を入れたところが本日の主な相談事項である。

本田：キーノートは1日目に2本ともやるのか。

堀田：セッションが5つなので、2+3にすると1日目に2つとなるかと思う。

本田：セッションが3+2になるかもしれないということはないか。

堀田：まだ分からない。

本田：3+2となるのであれば、キーノートのうち「日本的なインターネットガバナンステーマを少し深堀」の方を2日目に持ってくるという組み合わせは可能なのではないか。

前村：他に質問はないか。ないようであれば、33行目の、9月27日までに返事+日時選択が終わらな

かった提案は採用をキャンセルするのか、プログラム公開予定の 10 月 4 日まで待つのか、この件に関して意見をいただきたい。

堀田：残る 3 セッションから返事がもらえる見通しがついたが、万が一揃わない場合は記載の通りとしたい。

前村：異論はないか。なさそうなら、開会挨拶を誰がするか、挨拶時間は 5 分でよいかについて決めたい。開会挨拶なので開催主体が挨拶するということだと思うが、その主体が誰なのかという問いでもあるのかもしれない。今ここでキーノートの一つ目、二つ目、クロージングの辺りについて、候補者を入れていった方が多分早そうだと思うが、どうか。インターネットガバナンスへの招待の話者候補は誰がよいと思うか？

堀田：加藤幹之さんが以前よくやっていたような、インターネットガバナンスについて、というイメージだった。

前村：加藤さんでしっくり来るが、村井さんや、最近だとデジタル庁関係の文脈という想像はできるが、どんな感じか？

立石：10 月の終わりなので、衆議院選挙直前だと思う。だから呼ぶとするとデジタル庁の人位か。ご挨拶いただくのであれば、平井さんなどはすでに任期が切れている、という時期ではないかと思う。

山崎：村井さんを 1 ヶ月前に押さえるのはほぼ不可能だと思う。良くてビデオメッセージをもらえる位ではないかと思うので、村井さんと呼ぶ場合はバックアップで別の方も押さえた方がよいと思う。

小畑：インターネットガバナンスをやっているような人の方がよいと思う。

立石：デジタル庁の人で分かりそうな感じの人は、今いないと思う。

高松：オープニング／開会挨拶は先程前村さんが言ったように、主催（団体）がもしいるのであれば、主催者・後援者の挨拶を 5 分以内に収めるとよいと思った。キーノートの「インターネットガバナンスへの招待」は、いつも通り加藤さんにお話しいただくのが良いと思った。日本的インターネットガバナンスのテーマは深掘りになるのか分からないが、人が集まりそうという意味では、村井先生から直接でなくともビデオメッセージでお話しいただくのはありかと思う。最後のクロージングのところは正直候補が浮かばなかったが、オープニングとクロージングで主催後援（団体）半々で分けるという形もありかと思った。

前村：私自身で手を挙げるが、日本的インターネットガバナンステーマを少し深掘りということは、何かのアジェンダ、例えば海賊版とかを深掘りしたキーノートになるとか、そういったイメージでこれを書いているのか。

堀田：そこまで考えていない。日本人が分かりやすそうなものがあるのであれば、こういうものをインターネットガバナンスと言う、といった、インターネットガバナンスという単語自身をよく分かっていない人も多い中で、こういったことを考えていかなければ、というのをやって、テーマを例にして話すと分かりやすいのかなと思った位。

小畑：本来であれば、これが終わった後で速やかに組織化みたいな話をしているはずなので、本当は

その辺の体制に合わせて誰かが開会のあいさつをする、みたいなのがよいと思うのだが。例えばここで開会の挨拶をして、これはインターネットガバナンスの活動を日本で活発にするためにやっている。2021年のIGFの事前イベントとして組み立ててみた。この後はこの活動そのものを団体として続けていく予定、と少なくとも言う。その人がさっと消えて団体になった時に、あの人は関係ないだろう、というのはどう考えてもおかしい

立石：ただ、今そこまで見えないのでは。

小畑：そこまで見えないので、どうするのがよいのか。

前村：我々が今こうやって結構詰めて議論をして何かを前進させたいと思っている訳なので、そのためにはどうするのかっていうものが必要かと。

小畑：その次の「日本的インターネットガバナンス」のテーマを少し深掘するにしろ、その前の「インターネットガバナンスの招待」の内容が次の団体の活動に繋がっていくような内容でないと、あのイベントはなんだったのかみたいな話になる。そういう意味だと、3年、5年ぐらい先にどうなっていくのかを議論した上で、それを誰が喋ってくれるのか、みたいな形にしないと、例えばキャッチーだが村井さん出てこられた、挨拶された、秋になって団体できました、では少し違うような気がする。もちろん、村井さんが活動に参加していただけるならよいが。しかしそうすると、当然そこを見据えてこの団体のこの後の活動っていうのはこういう風に進んでいく予定、私も協力する、みたいな挨拶にきつとなると思う。だから特定の人を引っ張り出してきて、では誰に何を話させようかという議論をするのは、ちょっと材料がないというか、方向性が定まらないというか、その前に事前イベント後どのように進めていくかというようなことをもう少し考えてからやった方がよい気がする。もちろん誰かに頼むとなると時間がないということになる。

前村：キーノートと銘打って招待講演みたいなものが二つあるのと、挨拶が二つあるという形に今なっているが、どこかを削ったとしても、こういった意図でやろうとしているのですよ、といった目論見をきちんと説明することに時間を取った方がよいかもしれないと思った。その他ご意見はないか。

小畑：インターネットガバナンス的な活動を広げていこうという時に、例えばアメリカのIGFをやっている人たちはおそらくそれぞれの団体とは何も関係ないと思う。ピュアにアメリカのIGF会議を開くために活動している人たちで、そこに色々な人に参加してもらい、提案を出してもらわないといけないだろう。我々はグローバルでこういうIGFがあるがアメリカにも必要だからと同じようにやっている。それであなた達はグローバルなIGFにも出ているだろうからこういう際にも出てくれないかみたいな、そうやって大きくして行っただと思う。事務局にも専任とは言わないけれども職業的事務局員というか、色々な団体の中でIGF-USAの担当を依頼されて会長になっているような人がいたりする。そういうやり方もある。各省庁が抱えている、もしくは業界が抱えているような議論に皆さんどんどんマルチステークホルダーでやってくださいというプロモーションをして、あらゆる団体が常にではないけれども、マルチステークホルダー的な議論をする場も必ず設けようというのも、別なやり方だと思う。いづれにしても誰か活動をプロモーションしないと、引っ張っていかないと、誰も自ら動かないと思うので、どういう風に今後新しくできる団体が周りを巻き込んでいくかという道筋が全く見えない。そうすると日本的インターネットガバナンスって何ですか、どうなるのか。

前村：そうですね、何か決めないとそこがはっきりしない訳で。それが鶏卵だった。

小畑：例えば海賊版は日本特有のインターネットガバナンスの大きなテーマだが、今は幾つかの省庁の下で、それぞれが自分の好きな人を選んで議論して何らかの結論を出している。それで法制化されるのであれば、当然その招請した省庁の下で何らかの法律ができてくると。そうすると海賊版だから著作権法になるかもしれないし、通信であれば電気通信事業法などが出てくるかもしれないと、そういう風に進んでいる訳だが、全然マルチステークホルダーではないではないか。ではそれをマルチステークホルダーでやっていくにはどうやればいいかっていうのは、多分深堀しないといけないと思う。そうでないと単に海賊版って大変な問題だ、解決策をみんなで考えようか、全然我々の役目ではない訳で。そこが日本だったらどういう風になるというのが全く見えない。それが見えないと、多分挨拶する人も説明する人もよく分からないものを説明したり、よく分からない挨拶をすることになる。

前村：少し話のフォーカスが広がっている感じがするが、この辺の問題意識というのが働きかけ文書でも少し見えているところがあるので、そちらの話を先にやった方がよいかと思った。その上でまず今の時点でプログラムサブチームとして今の議論を踏まえてどういった見解なのかを堀田さんに伺ってよいか。

高松：少し前に席を外した。

4.4.2. ステークホルダーエンゲージメントサブチーム

前村：では先に私の文書を見てもらってよいか。堀田さんから、国内 IGF 活動への誘いなのか、イベントへの誘いなのかがよく分からないと指摘されていて、どちらかに固めないといけないと思うが、前者のつもりで書いている。まず IGF とは何かについて説明し、2023 年の IGF 日本開催が決まったので国内 IGF 活動を盛り上げていきたいという書き方をしている。大きな決意という部分に思いを込めている。その直後に 2 つ取り組みを行っている旨書いていて、1 つは IGF の行動原則を厳格に適用して応募要領などを予め定めた上でセッションを公募した。2 つ目は事前会合以降も活動が続くこと。マルチステークホルダーアプローチの対話でインターネットに関する様々な課題が検討され政府の公共政策やインターネット状のポリシーに生かされることが今後の ICT 社会の発展にぜひとも必要だと考える。そのために運営基盤の構築を進める、あたりまでが書ける内容かと。まだまだ足りていないものがあると思うのでご意見いただければ。

堀田：前村さんの文書の最後の 6 行について、決まっていないがやっていかなければ、という思いを共有するのが今回の事前会合の場と考えた方がよいのかもしれない。だから正直にこんなことやっていかなければいけないと思っているが、みんなどう思う、一緒にやるにはどうすればいいと思う、というように今回のプログラムを作るのであれば、キーノートではなくて何かそれについて話し合うセッションにして、例えば村井さんはオープニングで 15 分位将来の思いを語ってもらうぐらいの感じでもよいのでは、と思った。

小畑：村井さんをお願いするのであれば、例えば省庁間とかの調整にも積極的に入ってくださいといった感じをお願いの方がよいと思う。こういう内容で村井さんにキーノートをしてもらい、いや私は関係ないですけどというのは変。

前村：逆に言うと村井さんではなくて、そういうことに実際に取り組む人がやった方がよいのでは、

という気がする。

小畑：それは立派な活動ですねというご挨拶でもよいかもしれないが、そうなるも単なる挨拶で応援していますぐらいの感じになる。

前村：そうであれば誰か偉い人が来て挨拶するよりも、決意表明としてのこの 6 行みたいなのを考えているというのを前面に出した方が。

小畑：元々この活動は省庁の中では総務省と経産省が主体的に動いていたので、その人たちも一緒になって我々も頑張りますからという風になっているとベストなのではないか。なぜなら政策に生かすことなどを書いてある訳で。それなのに何か書いたのに全然出てこないのも変だし、ダイレクトにではないが、横から見ただけでもいいから見てくれ、というのは多分グローバルの IGF と同じような話だと思う。多分国連にしろその加盟国にしろ、政府関係者とか無視はもうできないよね、という風になっているのが一番よいのではないか。

前村：NRI か Japan IGF という言葉が残るかどうかわからないですが、こういう活動が情報通信審議会とかの代替になるとは思わないけれど、ここで喋ったら相当効果的に影響するということにならなければ、だれもやらないし、なっていれば積極的に参加することだと思う。

小畑：委員の中には違うステークホルダーと、（話せる機会が得られてよい）位で話している人もいるだろうし、あるいは話したいと思っているだけかもしれないが、そういう人もいると思う。結局自分の領域の中でいくら話をしても、結果的にそこでしか成果が上がらず、そこで成果が上がるように見えても、実は何の成果も上がらないので、少なくとも色々な関係者と色々な議論をしないとイケない。こういうイベントをやった時に、お互いに言いたい放題すれば、それだけでも一体何を考えているかというのは少なくとも分かるので意味はあると思う。

それをいかに作り上げるかだが、結局最終的に政策になる限りは縦割りなので、そこはデジタル庁であったとしても縦割り（の枠組み）が建てられていかんともしがたいので、そこにつなぐ人はどうしても政府から来てもらわないと無理だと思う。来てというのは関係していただかないと。

今回のイベントの中で、単にセッションに参加してもらうだけではなくて、これをもう少しプロモーションしていくと、ちょっと違う議論の場ができるだろうなと思ってもらえる人が出てきて、できればその辺の人たちの上の方の人たちなどが挨拶したり、キーノートしたりすると一番よいと思う。

前村：その他皆さん意見はないか？ちなみに飯田さんへの不躰な質問なのだが、これくらいの書きぶりだとどれくらい乗れそうかとか、どれくらいそれらしいということとか、修正の幅が少ないか多いかどんな感じの塩梅か？

飯田：この 6 行か？私ばつと拝見してまだ細かく読んだわけではないが、基本的な基調である、マルチステークホルダーが対等な立場で議論して政策を作っていくと言うのは、我々が色んな国際会議とかで話をしているというのと全く同じラインだと思うし、総務省の立場もこうだと思う。それをどうインプリメントするかというのはなかなか難しく、政府の立ち位置というのは対等に参加したいけれども、つい凶らずも目立ってしまったり、あるいは引込み過ぎているように見えてしまったり、というところの塩梅がなかなか難しいと思いつながらやっつけてはいるが、やっぱりナラティブとしては多

分こういうことなのだろうと思っているし、これをいかにうまく、まさに今の話であったように。当然これに総務省が、総務省以外もできれば早めにはと思うが、ちょっと今無理していると思うので、政府として参加しているのを見せる必要は多分あると思う。ただ基調講演とかで出ていくと、これまた政府のイベントみたいになってしまうのではないかという心配もある。どのくらいがよいのかというのは、最終的には皆さんの総意で決めていただくのが良く、我々としてはその結果戦略局長なり、適当な人間がオープニングに出ていくというアレンジも別に構わないと思う。

4.4.3. プログラム検討サブチーム（続き）

前村：一旦プログラムの方に戻って、これくらいの感じの共通の意識みたいなものはあるが決まっていないところで、とりあえず事前会合の手はずを進めていく上で、今日の結論みたいなものを出しておいた方がよいと思うが、オープニングやキーノート部分は当座どのような感じとするか？

堀田：先ほど少し触れたが、このキーノートの部分について、先ほどの 6 行がハイレベルなところではそうだと我々も思うし、みんなにも思ってもらおうとして、ではそのハイレベルをどうする、ミドルレベルに落とすのにどうするかという話をキーノートではなくてセッションとすれば、将来の繋がり、第一歩の会合という感じもしてよいのかなというのが先ほど言ったことだが、そういう風に作り変えてみるというのにもし皆さんも同意するのであれば、考えてみる。

前村：今の堀田さんの考えに異論などあるか？なければそんな感じで考えていくということで、当座この部分は TBD だということだと思うがよいか？それではそのようにしたいと思う。

続いて働きかけ文書の方だが、グーグルドライブの方で閲覧可能なので、コメントをお待ちしている。ひとまずこの二つのドキュメントに関してはこの辺で今日の議論としたいと思うがよいか？よさそうか。では次の議題に行きたいと思います。イベントサブチームの説明をお願いします。

4.4.4. イベント（ロジ周り中心）検討サブチーム

高松氏より、資料 3 を共有しつつ説明があった。

高松：開催形態について 1 点と、アナウンス関連で 2 点、計 3 点方針を確認させていただきたい。まず開催形態についてチームで検討した結果、オンライン開催がよいと思っている。その検討にあたって、完全オンライン（参加者も登壇者もオンライン）、ハイブリッド（登壇者が現地参加）、完全現地参加（参加者も登壇者も現地参加）のみのいずれにするかで考えている。設備的難易度と運営工数というのは現地のみ・オンラインのみのそれぞれに準備が必要なものがあるのに加えてハイブリッドでは両方準備が必要ということから、大中小それぞれ付けている。コロナ感染リスクについてはオンラインにすれば（参加者・登壇者間で）触れ合う機会は減るが、その分感染リスクも減るということを時期的にも気にした方がよいかと思っている。最後のエンゲージメント効果というのは、いかにインタラクティブに議論ができるか、意見交換ができるかといった辺りの部分である。もちろん現地の方が直接その場で顔を見ながら互いに登壇者も話者参加者もやり取りができるという意味で大にしている。ハイブリッドの場合は現地の人が発言回数が増えがちといったこともあり、あとオンラインという要素が入ってくるとモデレータ、進行役、質疑応答を拾う係といった部分でどうしても互いのインタラクティブなディスカッションは難しくなると思いこのような評価を付けている。今回着色しているが、より広く参加いただくことを目的にするのであれば完全オンラインが良いのかなというの

と、運営の負担、運営のしやすさという意味でもオンライン開催がよいのかなというのでこの案をお見せしている。

2 点目は開催アナウンスの実施についてとなる。これはイベント当日に向けてこれぐらいの頻度でアナウンスを外向きにできると、埋もれることなく認知され広がり続けるという想定で書いている。イメージは、早速来週なのだが、1 月前ぐらいからアナウンスを始めて、プログラムの今後の進み具合などにもよると思うが、随時情報が追加できればその内容で週に一回ぐらいはアナウンスが出せたらなというイメージで開催に向けて準備を進められればというのが括弧 2 番での提案である。

最後のアナウンス文面の確定については、できれば週に一回程度本イベントについてのアナウンスを出したいと考えている。現在、議事録や色々な方針を決める際に活発化チームメーリングリストで一週間ラストコールといったやり方をしているが、このアナウンス文面に関してはサブチームにお任せいただきたいと思っている。

前村：質問やコメントなどはあるか？

小畑：完全オンラインはパネルディスカッションには向かないと思うが。多分パネラーも紋切り型になり、次の方ご発言どうぞ、順番に行きませんか、みたいな感じになりかねない。発言者中にオンラインの人がいるというハイブリッドも結構運営が難しく、ではオンラインの方にお聞きしますが、といった間が入ってしまう。パネルディスカッションとしては、パネラーと司会者は現地にいる方が運用しやすいような気がする。意見も活発に出易いし。（オンラインだと）間が取れないと思う。要するにコントロールされた議論になりやすいと言うか、結論を出すようなものであれば、では皆さんから満遍なくご意見を、とすることができると、フリーに様々な考え方もあるというディスカッションを完全にオンラインで司会するのはとても難しいと思う。

堀田：小畑さんの仰ることはよく分かるが、提案者の方に聞いてみて、みんな自宅からでしかやりたくないとなれば集まれないので、まず聞いてみてはどうか？

小畑：それを完全に提案者に依存するかというのもなんだかなと思う。

堀田：多分提案する方は何らかのイメージを持っているはずで、集まってやった方が活発な議論ができるとしているかどうかによる。集まらないとうまくいかない、集まった方がよいはずだというのはもしかすると我々の思い込みかもしれないので、やはり提案された方に聞いてみるのが一番よいか。

小畑：その時に、ではやったことがあるのか？というの重要だと思う。

堀田：多分皆さんあるのではないかな。

小畑：完全オンラインのパネルか？

堀田：そう。私も含め、今回手を挙げている方はいるのではないかな。

小畑：単に私は懸念を示しただけで、紋切り型になって嫌だなと思っただけ。

前村：完全オンラインの運営がとても楽だというのは、JPNIC は半身がイベント主催者で、結構色々なものをオンラインでやっているし、Internet Week に関してはハイブリッドというのか、スタジオとい

っても会議室なのだが、スタジオに来て収録してもよいとしている。基本的にはオンラインでやらせてほしいが、オンラインでどうしても困る人は来てよいという言い方をしている。参加者を現地に入れるというハイブリッドはもっと大変になるが、登壇者だけが現地にいるというハイブリッドも完全オンラインに比べるとやはり難しい。というのは、現地のオーディオとオンラインのオーディオを混ぜるバランスを取る辺りが至難の業になっていて、あと入館者の分だけ感染症対策の手続きを踏まなければいけないというのも、結構重たくなっていく。それで本イベントでは登壇者の皆さんがみんな（スタジオに）来てやりたいと言う可能性がないとは言わないが、一方でオンラインを希望／出てきたくないという方はいそうな感じがする。感染症だって引いていないではないか、みたいに言われると、そこで手詰まりするということもある。小畑さんが言ったことの全部の場合をカバーしたかよく分からないが、完全オンラインというのはある程度妥当かなというのと、経験は積んでいる人（登壇者）が多いという感触も私自身はするが、これはバイアスがかかっているかもしれない。オンラインでしか（イベントを）やっていないという状況が長く続いているので、それに慣れてきているのは確かなのではないかと思った。

その他にコメントはあるか。括弧2（開催アナウンスの実施について）に行きたいと思う。開催アナウンス実施要領はとてもわかりやすいと思う。こちらに異論はあるか。あるいは不明点はあるか？

堀田：10月5日のアナウンスでプログラム概要と書いてあるので、先ほどキーンノートではなく盛り上げ方のパネルみたいにしたらという辺りはこの日までに決める感じか？

前村：そうだと思う。

堀田：これから2週間で活発化チームのメーリングリスト上で決めるというような感じであれば、2週間だから決まるのか。

前村：さぼらずに議論を詰めていくことが必要。異論がある方ももちろん言ってほしい。もう一点だがアナウンス文面の確定に関して異論ある人はいるか？オペレーショナルなもので、方針を決めるものではないと思うので、方針としては要領やプログラムの募集要領や選考要領は方針めいた部分が多分にあるので処置が慎重になったが、文面確定などは、もちろん何も共有せずに出ていくということは考えにくく、こんな感じで出しますというのがある方がプロセスとしてはよいのかもしれない。しかし1週間のラストコールに縛られないで自動的にやりたいというような、イベントの方の取り回しでもあったが、この辺は皆さんご了承いただければありがたいと思っている。では開催形式はどうするか。決めるのは急いさほうか？高松さんに聞くということか？

高松：プログラムサブチームの人達が登壇者の予定を抑える時に現地に来てくださいみたいな言い方をするのか、オンラインだと言うのかで拘束時間が変わってくるので、予定などが変わるのかなと思ったので、早く決めた方がよいと思っていた。先の堀田さんの発言でどちらがよいかをまずは各提案者に聞いてみるということであれば、その結果に応じてという形でも良いと思う。

前村：少なくとも開催アナウンスでは参加者に関してはオンライン参加だと言うことか？今ハイブリッドを選択するのであれば、登壇者は現地である可能性があるが、アナウンスメントの内容は変えないということは、そこには左右されないということか。そうであればいつまでに決めればよいかは、まずは登壇者にヒアリングをした上でどちらにするかをなんらかのタイミングで決めるということに

したい。

堀田：それでよければ、私がプログラムチームから聞いてみるが。もちろん小畑さんが言ったように現地でなければ嫌だという人がいるかもしれないとなるが、現場を設営する人は本当に大丈夫かということについては、そこが困難過ぎて百パーセント保証できないと言われるのであれば、もう今オンラインで決めた方がよいと思った。

前村：それはどうやって決まるかと言うと、JPNIC が機材やスタジオの工面とかをすることだろうから、我々の状況をきっちりと固めておくのがよい。その辺を明確にして来週早々にでもお伝えできるようにしたい。

小畑：対面登壇だと目を合わせるとか、色々なインタラクションがある。司会者が良い発言してほしいので、裏側でこの発言にここで声を掛けたいのだが、みたいなものは、完全オンラインでウェビナーをやっている際は（どのように実現できるのか）。

前村：道具建てとしては、Zoom を想定するならば、パネリストだけに限定して（チャットを）やるという方法があるが、それだと（参加者）全員に（チャットを誤送信）してしまうリスクがあり、バックチャンネルを別のチャットサービスで準備するみたいなことをやったりする。

小畑：ウェビナー形式で開催した時に、参加者から質問を募ったりできるのか？

山崎：ウェビナーに Q&A 機能があるのでそれで受けることもできるし、チャットで受けることも可能。Slido など別のシステムでやるというのが最近の流行。

前村：Zoom で完結させるにしても、挙手してもらい、ミュートを解除し発言権をこちらから付与することもできる。その辺のノウハウは溜まっていると思う。

小畑：そうするとパネラーの人たちと提案者に聞くということか。参加者が現地というのは凄く大変なのでやめた方がよいと思うが、パネラーだけ現地なのか、パネラーも全員オンラインなのかっていうのは、セッション毎に違ってよいのか？

前村：そう、可能性はあると思う。

小畑：総合司会もオンラインになるのか？それも大変なような気がするが。

前村：大丈夫だと思う。たまたま JPNIC はオフィスにスタジオがあるので、自分の場合にはそこで司会するということが選択としてありえるが。

小畑：そういうスタジオで、一人で回せるのか？アシスタントがそばにいた方がよいのではないかとそれを全部オンラインでやると、スタッフとの間の連絡もオンラインになってしまう訳で、それは相当ハイレベルな能力だと思う。自分の周りに端末を3台か4台ぐらい並べてやらないと。

山崎：周りに（アシスタントが）いるのが一番理想かもしれないが、色々な制約、例えば JPNIC の会議室だと、コロナ対策で最大何人までという制限があるので、そうすると前村であっても別の部屋から参加する可能性もあり、その場合やはりオンラインでやり取りをする必要が出てくるかもしれない。

小畑：そこはオンラインがよいが、総合司会もオンライン、スタッフもオンラインみたいな感じで本

当に進められるのか？

山崎：去年の秋に IGF2019 報告会/2020 事前会合を開催しており、もう少し規模の大きいイベントの経験もしているので何とかかなと思う。逆にスタッフを割り当てるとしても、せいぜい技術の人を一人か二人貼り付けるのが精一杯かと思う。

小畑：登壇者が一人ずつ三つ四つっていうのはできると思うが、今回はパネルの連続ではないか。それを全部総合司会とも連絡しながら実施するというのはちょっときついのではと思っただけだ。

前村：その辺はチェックしていかなければならない。あとは登壇者にも意向を確認して決めていく必要があるが、こちらの方は登壇者の行動だけに影響することなので、アナウンスメントにはあまり関係なさそうだという感じではないか。その他本件で意見はあるか？

4.5. Todo 確認

堀田：今の話だと、登壇者にはもう今日（都合および現地／遠隔登壇について）聞いてしまってもいい位か。

前村：よいと思う。

堀田：ではそれで言うようにする。

4.6. 次回打合せ

前村：次回の打ち合わせだが、3 週おきという規則に従うと 10 月の 11 日となる。そうすると事前会合 2 週間前になるが、こういうタイミングで次の会合を打ってよいか？もちろんメーリングリストを中心としてオンラインで色んな意思確認をしていく必要というのはあると思うが。

皆さん異論なしと承ったので、10 月 11 日の 17 時から開始としたいと思う。検討が進んで色々なものを準備していくので、メーリングリストの方で作業をしている人たちを助けていただけるとありがたいと思う。

4.7. その他

前村より、他に情報共有や問い合わせなどがあるかどうか確認を行ったが、特に発言はなかったため、チーム会合を終了する旨宣言した。

以上